

《新刊紹介》

踊共二『非暴力主義の誕生——武器を捨てた宗教改革』

三坂 巧

本書は宗教改革から生まれた再洗礼派、中でもメノナイトやアーミッシュと呼ばれた人々に着目し、彼らがとったノンレジスタンス（非暴力主義）という立場を扱う新書である。再洗礼派の信徒は16世紀から21世紀にかけて、兵役拒否の表明や逮捕、亡命といった様々な経験をしてきた。本書では、そのような彼らの経験が豊富な史料を用いて具体的に再現されている。著者である踊共二は武蔵大学リベラルアーツ&サイエンス教育センターで教授を務めており、近世スイスにおける宗教改革や宗派化論を専門としている。代表的な著作の1つに『改宗と亡命の社会史——近世スイスにおける国家・共同体・個人』（創文社、2003年）が挙げられる。この新刊紹介では、本書の構成と内容をまとめた後、本書を通じて紹介者が考えたことを述べる。

本書は「はじめに——再洗礼派というマイノリティ」と第1章でノンレジスタンスや再洗礼派の出現について解説し、第2章で再洗礼派への様々な迫害を取り上げている。第3章から第7章では、再洗礼派の歴史について年代順に論じ、終章でノンレジスタンスや非暴力主義の限界と現状について論じている。

第1章「複数の宗教改革」で著者は、古代・中世カトリック教会、ルター、ツヴィングリにおける「正戦」や「聖戦」に触れた後、再洗礼派の出現と彼らがとったノンレジスタンスという立場を論じている。再洗礼派はチューリヒで幼児洗礼の廃止と成人洗礼の導入を主張する宗教改革急進派として誕生し、その後迫害を受けつつもスイス各地に伝播した。1527年に「シュライトハイム信仰告白」が編まれたことでノンレジスタンスの路線が彼らの主流となった。再洗礼派の主な宗派としてはメノナイトとアーミッシュが挙げられる。メノナイトは16世紀初頭に低地地方で生まれ、激しい迫害を受けたが、16世紀後半以降、オランダで寛容の対象となった。1632年に内部の教義論争を終結させた「ドルトレヒト信仰告白」が採択されたことでメノナイトは教義的にも安定した。この信仰告白は後にスイス系再洗礼派にも広まった。アーミッシュは、17世紀後半にスイス・メノナイトに加わったヤーコプ・アマンが改革を断行して生まれた宗派である。

第2章「迫害と離散——ヨーロッパの片隅で」は、再洗礼派が経験した迫害を考察している。著者は初めに、現在のウクライナ南部に居住しているメノナイトが被ってきた迫害に触れ、次に再洗礼派が近世に経験した迫害と殉教、ノンレジスタンスについて様々な史料をもとに議論している。再洗礼派で共有されているのは、成人洗礼に加えてノンレジスタンスである。正しい信仰を迫害する者には神が怒りをもって復讐するという「神罰」に対する再洗礼派の立場は当初は多様であったが、次第に迫害者のために祈る「愛敵」と「赦し」の姿勢

が支配的になる。彼らの非暴力主義は、宗教実践の一環たるノンレジスタントな宗教的不服従である。この思想こそが社会秩序を脅かすとして危険視された。

第3章「追跡する国家」は、主に18世紀前半までのスイスにおける再洗礼派の主要な出来事を取り上げ、アーミッシュ誕生の経緯も解説している。まず、ベルンにおける再洗礼派への厳しい取締りを、ついで、アルザスに亡命し潜伏した再洗礼派を論じている。寛容な領主のいるアルザスに逃れた再洗礼派は後に同地で現実社会に適応する傾向を見せ、1660年には「ドルドレヒト信仰告白」を受容し、メノナイト化した。こうした中、1690年代に前述のヤーコブ・アマンがアルザスに亡命してきた。彼は同地で規律の緩みを目にし、スイス・メノナイトの穏健派に論争を挑んだ結果、相互破門という結果となり、ここにアーミッシュが誕生することとなった。しかし、1712年にフランス王ルイ14世が追放令を出したため、アルザスの再洗礼派は亡命を強いられた。また、17世紀に西南ドイツへと移住したスイスの再洗礼派は、三十年戦争による荒廃からの復興のため、特許状に基づいてプファルツ選帝侯によって受け入れられた。本章は再洗礼派の集団追放も取り上げている。1709年にベルンから再洗礼派を国外追放する計画が実行に移され、50人の再洗礼派が北米へと移住させられた。さらに、1711年には獄中の再洗礼派約300人が事実上の追放刑に処せられ、プロイセンやオランダに移住した。こうした集団追放を経ても、ベルンには再洗礼派が残り続け、彼らへの追跡と監視は19世紀になっても続いた。

第4章「新天地アメリカ」で著者は、再洗礼派信徒のアメリカへの移住と独立戦争までの彼らの歴史を追っている。17世紀末に始まったメノナイトのアメリカ移住は18世紀を通して増加した。一方、アーミッシュは1737年に初めて集団でアメリカに移住した。アーミッシュは大家族を形成するため、土地不足に陥り、再移住することもあった。さらに19世紀前半にはヨーロッパの政治状況からアーミッシュの移住が増加し、北米に3000人以上が到来した。両宗派の信徒は、多くがペンシルヴァニアに居住した。ペンシルヴァニアのドイツ系移民の中には他にルター派、改革派、敬虔派、シュヴェンクフェルダー、ダンカーの信徒も含まれており、フス派の流れを汲むモラヴィアンもいた。これらの諸宗派はそれぞれ交流と反目を経験しており、非暴力主義への立場も異なった。また、暴力に満ちた植民地時代には、移民も戦争に巻き込まれることがあり、先住民による襲撃を受けることもあった。独立戦争期の民兵隊への参加は、当初は宗教的な理由から志願制とされていたが、1776年に独立宣言が採択されると、非暴力主義をとる再洗礼派の信徒も民兵組織に入ることが求められた。こうして、民兵隊への登録は強制されたが、これは事実上の徴兵制であり、再洗礼派はヨーロッパで受けたのと同様の迫害を新天地アメリカでも経験することになった。

第5章「近代国家と徴兵制」で著者は、19世紀の再洗礼派を考察している。フランス、ドイツ、オランダ・スイス、アメリカといった各地に離散して暮らした再洗礼派にとって、この時代に特徴的なのは徴兵制導入に起因する様々な経験である。近代国家が形成される中で市民的義務としての兵役を巡り、兵役を拒まない進歩派とノンレジスタンスを重んじる伝統主義者との間で論争が各地で行われた。また、兵役の代替案として特別税の納入と軍

隊内の非戦闘部門での服務が求められることもあった。こうして、ノンレジスタンスは形骸化の危機に瀕した。概して、ヨーロッパに残った再洗礼派は立憲国家に適応し、従軍もしくは代替措置を受け入れた一方、伝統主義者は北米に移住し、分離主義とノンレジスタンスを守ろうとしたと言える。しかし、北米に逃れた再洗礼派も、南北戦争に際して再び徴兵の危機に直面し、たびたび分裂を経験した。

第6章「両大戦の試練」は、ドイツ、ロシア、アメリカの再洗礼派をナショナリズムに関連づけて論じている。ドイツ帝国では、ノンレジスタンスの信念に従う人々は非戦闘部門につくことが許されたが、一定数軍務に就く再洗礼派もいた。また、戦間期や第二次世界大戦期にナチスに協力したメノナイトも存在した。ロシア帝国では、軍に属さない公的機関の下に収容所を設け、メノナイトにはそこでの営林や消防に従事させることで、従軍の代替とする制度が導入された。しかし、宗教それ自体を敵視したソヴィエト時代にメノナイトはまたも迫害を受け、パラグアイなどへの移住を強いられた。スターリン期には、兵役拒否者は投獄や処刑の対象となった。アメリカでは、第一次世界大戦時の徴兵に際して、メノナイトなどの良心的兵役拒否者（CO: conscientious objector の略称）への対応が不十分で、一旦軍隊に入れた後に非戦闘部門に従事させるという方策がとられた。しかし、軍が命じる仕事は一切できないと主張するものも一定数おり、彼らは暴力の対象となったり、軍法会議にかけられたりして、服従を迫られた。こうした中、1937年にアメリカ・カナダのメノナイトがあらゆる形式の兵役も戦争協力も受け入れないと宣言し、両政府に代替役務の導入を求めた。これを受け、カナダでは代替奉仕制度、アメリカでは市民的公共奉仕の制度が導入され、COはその任務に就くことになった。

第7章「核の時代の非暴力主義」は、戦後の非暴力主義を扱っている。著者はまず、アメリカのメノナイト宣教師夫妻の日本への宣教を取り上げている。この夫妻は、広島の実験者の講演を聞いて日本へ向かうことを志願した。彼らはかつての敵国の市民同士が互いに赦し、赦される平和的関係を築くことを目標としていた。また戦後には、メノナイトやアーミッシュによる人道活動が国際化し、良心的兵役拒否が合法化された。特に後者は、ヨーロッパ諸国で進んだプロセスである。しかし、ウクライナでは代替役務の制度が導入されているものの、2022年のロシア軍による全面侵攻以降は順守されていない。韓国などでは代替役務が懲罰的なものになっていることも課題として挙げられる。徹底的・絶対的なノンレジスタンスは矛盾や犠牲を伴うこともある。テロや事故の犠牲者となった際、犯人を赦すアーミッシュ信徒の遺族もいる。現代では都会での生活に影響を受けるアーミッシュや、ボランティア活動に従事するアーミッシュやメノナイトもいる。メノナイト・アクションという草の根反戦団体が非暴力な市民的不服従運動として行ったガザ停戦運動もある。著者は、そのような市民的不服従は「非暴力的抵抗」であると主張し、現代のメノナイトがノンレジスタンスではなくレジスタンスを実行している可能性を指摘している。

終章「ノンレジスタンスの限界と可能性」は、宗教・宗派を越えたノンレジスタンス思想を考察している。キング牧師やガンディーの思想とメノナイトの思想は比較可能である。ヴ

ベトナム戦争に反対して行った演説でキングは、武器を持たない真実と無条件の愛こそが最後に勝利するという信念を掲げたが、これは再洗礼派が唱えたノンレジスタンスとほぼ同じである。古今東西の平和思想においてノンレジスタンスの姿勢は、繰り返し放棄されてきたが、その都度復活してもいる。現在のロシア、ウクライナには戦意を喪失した兵士が多くいるが、人を傷つけることに悲しみを感じる人が増加したことは、文明化や文化の発展の結果ともいえよう。こうした状況下で、ノンレジスタンスを信条とする再洗礼派はその社会的役割を広げている。

本書は、再洗礼派が暴力に反対すればするほど、平和を訴えれば訴えるほど、逆説的に政治当局や多数派からの暴力・迫害の餌食となるということが歴史を通して繰り返されてきたと論じている。そうした状況でも彼らは亡命生活を送り、信仰を維持してきた。「あとがき」でも述べられているように、現代の戦争では、交戦国が各々の「正義」の名のもとに報復感情を持ち、組織的に殺人行為をしている。ガザやウクライナなどで報復の連鎖が繰り返されている現在でこそ、愛敵のために赦しを祈る再洗礼派の非暴力主義やノンレジスタンスの信条は、平和のために一定の役割を果たし得るのではなかろうか。

(新赤版 238 頁 2025 年 1 月 岩波書店 税別 940 円)

(京都大学大学院文学研究科修士課程 1 回生)